

**Citation:** Fedorowicz Z, Nasser M, Wilson N. Adhesively bonded versus non-bonded amalgam restorations for dental caries. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2009, Issue 4. Art. No.: CD007517. DOI: 10.1002/14651858.CD007517.pub2

**CRG名:** Oral Health

### [最新版\(英語版\)はこちら](#)

**英語版最終改訂年月:** July 24, 2009

**Clib issue No.;** N/U: 2009, Issue 4

**背景:** むし歯は人類を苦しめる、最もありふれた病気のひとつである。高所得国の80%の人々が罹患していると推定される。むし歯は歯髄(神経)を含んだ歯の組織に悪影響を及ぼして徐々に破壊し、歯を変色、弱体化させて、機能を低下させる。象牙質に達してう窩を形成したむし歯病変の治療は、修復物(充填物)を必要とする。

**目的:** 歯科用アマルガム修復物の寿命と使用中の機能に対する接着材の効果を評価する。

**検索戦略:** 2009年の7月に(以下の)データベース検索を行った。コクラン・オーラル・ヘルスグループのトライアールレジスター; CENTRAL (The Cochrane Library 2009, Issue 3); MEDLINE (1950年から2009年7月); EMBASE (1980年から2009年7月)。

**選択基準:** 成人の小臼歯、大臼歯の1級、2級のアマルガム修復において、接着性アマルガム修復と保持形態を付与した伝統的な非接着性アマルガム修復を比較したランダム化比較試験。

**データ収集と分析:** 二名のレビュアーが独立して文献をスクリーニングし、含まれている試験の細部を抽出し、バイアスのリスクを評価した。

**主な結果:** 31名の患者に113か所の修復を行った1つの研究が採用された。2年間で非接着性グループの53か所の修復物のうち3つだけが脱離したが、それらは保持形態の欠如によるものであった。60か所の接着性修復物のうち55は成功し、5つは追跡不能だった。ベースライン時や2年後のフォローアップ時において、充填後の過敏症に有意差はみられなかった( $P > 0.05$ )。歯牙組織の破折の報告はなく、辺縁封鎖においても両群および対応する修復物のペアに有意差はみられなかった( $P > 0.05$ )。

**レビューアの結論:** 接着性アマルガムと非接着性アマルガムの寿命を是非できるエビデンスはない。本レビューでは、研究方法は妥当だが、いくぶん過小評価な試験がひとつだけ見つかった。この試験では、中等度の大きさの接着性アマルガム修復物の使用中の機能について、非接着性アマルガム修復物と2年間にわたって比較したが、生存率や辺縁適合性に関して有意差が認められなかった。非接着性アマルガムと比較して、接着性アマルガムに付加的な便益があるというエビデンスが欠如していることから、臨床家は余計な費用が生じうることを心に止めておくことが重要である。

(翻訳 豊島 義博・監訳 大山 篤; JCOHR)

翻訳公開日: 2012年2月7日

**ご注意:** この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。